

卒業論文

観光地としての植民地遺産

ゴアからの考察

日本大学国際関係学部

国際交流学科 4年

小代有希子教授ゼミナール

小島 尚子

2009年1月16日

目次

はじめに

1章 ゴアの歴史

征服と黄金時代(1510年～1600年)

帝国の夢と消滅と延命の時代(1600年～1813年)

執着(1813年～1961年)

ゴアに固執する理由

現在のゴア

2章 世界遺産としてのオールドゴア

世界遺産

負の世界遺産

オールドゴアの町並み

3章 観光資源としての植民地遺産

マカオの場合

マラッカの場合

ポルトガル支配以外の植民地遺産

日本の統治下にあった地域の場合

第4章 まとめ

観光と植民地遺産

これからの観光地としての植民地遺産

使用文献一覧表

資料写真

観光地としての植民地遺産：ゴアからの考察

日本大学国際関係学部交流学科 4 年

小島 尚子

はじめに

インドーゴア州。商業都市として有名なムンバイの南約 300 キロにあり、アラビア海に面している、インドの中でもっとも小さな州だ。16 世紀初頭、この地はポルトガル領となり「黄金のゴア」と呼ばれるほど発展した。そんなゴア州にあるゴア大学に、私は 2007 年 9 月から 2008 年 2 月までの半年間、留学をしていた。

留学する以前、私はゴアのことなど全く知らなかった。マスコミで目にするインドと言えば、カラフルなサリーを見にまとった女性がいて、スパイスの効いたカレーを手で食べ、ガンジス川で沐浴をし、町のいたるところにあるモスクやヒンドゥー教の寺院で熱心にお祈りをしている人びとの暮らすところだ。また中学の社会科で習ったようにインド国民の 80% 近くはヒンドゥー教徒であり、信仰心が厚く、神として崇められる牛の肉は決して口にせず、酒やタバコも禁じられ、カースト制に基づいた厳しい上下関係を守り続けているのであろうと考えていた。私の持つインドのイメージとはこのようにどこか閉鎖的なもので、ゴアも例外ではないのだろうと思っていた。

しかしゴアに足を踏み入れると、現実には私のイメージと全く異なっていることに驚いた。ゴア州の中心地 パナジ (Panjim) という街には、サリーではなくジーンズやスカートをはいた人も多く、ラコステやベネトン、リーバイスなど日本でもおなじみのショップが並んでおり、マーケットには酒やタバコを扱う店が数多くあった。街の中心にはパナジ教会 (Panjim Church) という大きな教会があり、その周辺には牛肉のステーキを提供するレストランもあった。12 月にはいると街は一気にクリスマス・ムードになり、

店先にはクリスマス・ツリーが置かれ、アクリル絵の具のようなものでサンタやトナカイなどの絵が描かれ、クリスマスの雰囲気を高めていた。（写真1、2）

また オールド・ゴア (Old Goa) と呼ばれるポルトガル植民地時代に栄えた地域には、真っ白な教会、レンガ造りの聖堂があり、その周辺にはポルトガル風の大邸宅が数多く残っていた。ここでは白人の観光客(特にイギリス人をはじめとしたヨーロッパ人たちが)やたらと目に付き、およそインドとは思えないような光景が広がっていたのだ。ちなみにこのオールド・ゴアは1986年に「ゴアの教会と修道院」として世界遺産に登録されている。

私は戸惑った。私がイメージしていた“インドーゴア”のイメージと、実際のゴアはあまりに異なっていたからだ。 またそれと共にひとつの疑問が浮上した。

日本が第二次世界大戦前に植民地化していた地域では、日本の敗戦が決まると日本人が建てた日本家屋や神社などは現地の人によって壊され、今ではあまり残っていない。そしてその後も、韓国などは日本統治時代の建築物を意図的に撤去してきた。それは、植民地支配というものに現地の人々が反感を感じる限り、当然の対応であろうと思えた。にもかかわらず、ゴアのインド人はかつての異民族支配を思い出させるようなポルトガル風の家に住み、ポルトガル人が残したキリスト教の教会に通い、クリスマスも祝う。それだけでなくオールド・ゴアでは、教会や修道院が“世界遺産”として大切に守られ、ゴアの観光の目玉にさえなっている。

この違いは何であろう。単にゴアの人たちは昔ながらの建物を大切に保存したいだけなのか。それとも彼らは、ポルトガル人による長い占領の間に“インド人”である事を忘れてしまったのであろうか、または、憎い支配であっても、観光収入をあげるために、単に“カネ”のために残しているのであろうか。

私はこの理由が知りたくてこの研究を始めた。この卒論では以下のように論を展開していく。 まず第1章では、ゴアの歴史を概観し、ポルトガル人がどのように支配してきたかを説明する。第2章では植民地遺産としてのオールド・ゴアを世界遺産と絡めて考え、世界遺産としての価値を明らかにする。そして第3章では世界各国に残る植民地遺産を概観し、観光資源としての植民地遺産を検討する。 第4章では観光と植民地遺産の関係についてまとめをし、これからの植民地遺産のあり方について述べる。

1章 ゴアの歴史

現在、“ゴア州”と呼ばれている地域は、アラビア海に注ぐマンドヴィ川が流れ 海上交易に非常に適した地理的条件を備えていた。そのため、多くの国がこの地を手に入れたと考え、16世紀はじめにはデカン高原のイスラム王国であるビジャープル王国とヒンドゥーのヴィジャヤナガル王国が互いに覇を争っていた。

当時のインド貿易は、イスラムのアラブ商人が独占していた。彼らはアラビア海の制海権を握り、胡椒や馬、真珠などを運んで莫大な富を手に入れていた。この貿易による富を、ポルトガル人もまた手に入れたと考えようになった。そこでポルトガル国王から命を受けたヴァスコ・ダ・ガマは、インドを目指した。1498年5月20日、ヴァスコ・ダ・ガマはアフリカ大陸南端の「喜望峰 (Cape of Good Hope)」を周って、インド南部のカリカットに到着した。この新しい航路は、当時トルコの圧迫に悩まされていたヨーロッパ諸国にとって新しい希望を与える。

その後、1510年にポルトガル提督アフォンソ・デ・アルブケルケが1000人のポルトガル兵を率いて、当時ゴアを制していたビジャープル王国を負かし征服した。この戦闘では、早い段階でポルトガルの勝利が見えていたが、ビジャープル王国のイスラム教徒はなおも寺院などに立てこもり抵抗した。この抵抗に対しアルブケルケは、寺院ごとイスラム教徒たちを焼却し、最終的には6000人ものイスラム教徒が命を落とした。

こうして1510年11月25日、ゴアはポルトガルの占領下におちた。その後、ポルトガルは1961年までゴアを支配し続ける。このポルトガル支配の451年の歴史をM.ホールは次のような段階に分類している。

1510年～1600年	征服と黄金の時代
1600年～1660年	帝国の夢の消滅
1660年～1813年	延命の時代
1813年～1961年	執着 ¹

以下この段階に準じて、ポルトガルのゴア支配をまとめてみる。

¹ 鈴木義里『もうひとつのインド、ゴアからのながめ』（三元社 2006年）、P68-69。

征服と黄金時代(1510年～1600年)

ゴア征服の指揮者であったアルブケルケはポルトガル領インド総督になり、それまで貿易を独占していたイスラム教徒を追放して「広くアジア諸国と交易を結ぶポルトガルの東インド会社を設立すること」² を目的に統治を進めた。そのため彼はヒンドゥー教徒に対しては比較的友好的な態度をとり、キリスト（カトリック）教への改教も特に望まなかった。それどころかアルブケルケは ヒンドゥー教徒がポルトガルへの忠義を高めるように、ゴアの女性とポルトガル人との間の“混血政策”をとり、異民族間結婚を奨励し、ヒンドゥー教徒に家や土地、食料、そして仕事までも与えた。また病院やゴア議会も設立してゴアの安定を図った。

占領下ゴアの町を開発する際にモデルとしたのは、母国ポルトガルのリスボンであった。16世紀半ばにゴアを訪れたポルトガルの大詩人ルイス・ヴァス・デ・カモンイス（1524－1580）は、叙事詩『ルシタニアの人々』のなかで、ポルトガルの領土拡大とキリスト教普及の努力を大いに称賛し、繁栄するゴアの町を「東方一の貴婦人」と形容するほどであった。なお、ゴアの町の構造については次章で詳しく述べる事にする。

初代総督のアルブケルケは前述の通り、宗教に対して寛容な態度をとっていた。しかし、こうした寛容さはカトリックの宣教師達にとって面白くなかった。アルブケルケの死後、ポルトガル政府は徹底的にゴアのキリスト教化政策を推し進めた。1519年には王令によって医療援助はキリスト教徒のみを対象とするようになり、1540年からは本格的にキリスト教以外の宗教を迫害する政策をとった。1559年には非キリスト教徒の公職追放、1560年にはバラモンのゴア追放とヒンドゥー教のあらゆる宗教儀式的禁止、さらに1567年は異教徒召使の雇用禁止、異教医師による治療禁止などが命じられた。同時にヒンドゥー教とイスラム教徒は公式的礼拝が禁じられ、寺院やモスクは破壊され、代わって新しくキリスト教会が建てられた。（写真3） また1560年には、日本でも馴染み深いフランシスコ・ザビエルが助言し、異端審問所が作られた。そこで有罪を言い渡されたインド人は合計4,046名にのぼり、火あぶりの刑を宣告されたのは121名に上ったという。そのため1560年には1年間で13,092名、1578年は100,000名もの人が強制的にキリスト教に改教させられた。

² 野間佐和子 『ユネスコ世界遺産（5）インド亜大陸』（講談社、1997年）、P179。

このようにキリスト教布教が一体化したポルトガルの植民地統治のもとにゴアは発展していった。ゴアは、アフリカ大陸東海岸のモザンビークから長崎に広がるポルトガル海上帝国の首府として“東洋のローマ”と呼ばれ、やがて黄金時代を迎える。ゴアの人口は20万人に達し、市内には豪華な教会や修道院、総督府など建物が立ち並んだ。

ちなみにザビエルだが、彼は1549年に日本に布教にやってくる前ゴアに3年間滞在していた。日本での布教活動を終え1552年に再びゴアに戻り、またすぐに布教の為に中国へ向かった。しかし中国本土に入る途中の上川島で熱病になり、46歳でこの世を去った。遺体はその地に埋葬され、後日マラッカに移送された。その際棺を開いたところ遺体は腐敗した様子がなかったという。人々は遺体をさらにゴアに移し、現在はゴアのボン・ジェズ教会に眠っている。これが、日本に馴染み深いザビエルとゴアの由縁である。

帝国の夢と消滅と延命の時代(1600年～1813年)

1580年ポルトガルはスペインに併合され、ポルトガル人の海外支配はスペインに従属するようになる。しかし1640年には独立を回復させ、ポルトガルの海上帝国は1650年ごろ全盛期を迎えた。この頃ポルトガル帝国の西の方では紅海と地中海を経由したヨーロッパへのコショウ輸出が息を吹き返し、東の方ではスマトラにイスラムのアチェー王国が繁栄し始めていた。また、インド本土ではムガル帝国が登場している。17世紀にはヨーロッパ諸国が東インド会社を設立し、特にオランダの活動はポルトガルに大きな打撃を与えた。ポルトガルはホルムズ、マラッカ、コチン、セイロンなどの重要な拠点を次々と失い、1666年までにはゴア、ディウ、マカオなどの9つの拠点を持つにすぎない小さな勢力になっていた。その後オランダがゴアを何度も包囲し、ポルトガルが築いた修道院や他のキリスト教施設までも破壊した。しかし、オランダはゴアを陥落させるには至らなかった。また、イギリスがインドに植民地帝国を築いた際も、ポルトガルはゴアを手放さなかった。

一方ゴア自体は、17世紀半ばに南インドのヒンドゥー帝国ヴィジャヤナガラが崩壊すると、重要な交易の相手を失い徐々に衰退していった。加えて、17世紀ごろからゴアではコレラやマラリアなどが相次いで流行し、人口が減少していた。1759年にはこれら感

染病の流行から、ポルトガル政庁がゴア・ヴェルハ(現在のオールド・ゴア)から西方8キロメートルのゴア・ノヴァ(現在のパナジ)へと移転する。イエズス会のバシリカや付属修道院の建物は湿気におかされ、回廊も廃墟の静寂に包まれた。16世紀半ばには「黄金のゴア」と呼ばれたこの街も、ポルトガルの衰退と共に急速に衰えていった。

執着 (1813年～1961年)

ポルトガル領インドはゴア、ティヴ、ダマンを併せても総面積1537平方マイル、人口62万ほどで、ポルトガルにとって針の先のようなものである。確かにゴアには鉄鋼、マンガン、塩や魚、ココナッツなどの産物があり、貿易のチャンスもあるかもしれない。しかしこれらの産物も産額はたいしたことはなく、他に替えがないというほどのものではない。また上記の通りゴアはすっかりさびれてしまったし、政治的に大切な機関があるわけでもない。にもかかわらず、ポルトガルの支配は第二次世界大戦後の1961年まで続いた。

第二次世界大戦を経て、インド本土はイギリスから独立する。イギリス支配下のインドでは、例えば日露戦争における日本の勝利(非白人国家による白人国家に対する勝利)などの影響を受けて、民族自決の理念が高まり、民族運動が高揚していき、そこに非暴力・不服従をうたったマハトマ・ガンディーが登場し、民族運動は民衆にも広がっていった。第一次世界大戦の際イギリスが戦後には自治を認めるような約束をしたため、それを信じてイギリスに戦争協力し、結果として裏切られる。しかし民族運動は長い努力を経てかなりの力をつけ、第二次世界大戦後の1946年2月にはボンベイに駐留するイギリス艦隊のインド水兵が反乱を起こし、それと連携する大ストライキにも発展した。その頃のイギリスは中東の石油利権を入手したこともあり、これ以上インドにこだわることをやめた。そして1947年8月15日、インド本土は宗教上の理由からインドとパキスタンに分かれての分離独立を達成する。

この独立に伴い、インド政府はインドの他の部分を領有していたフランスやポルトガルにも領土の返還を求めた。1954年には平和的話し合いの方法で、フランスからポンディシェリーなどの旧植民地を取り戻した。第二次世界大戦後の世界は「民族解放と民族

独立の時代」となっていったのだ。³ にもかかわらず、ポルトガルが統治する領土に関しては、当時のサラザール政権がインドへの返還に応じず、独立したばかりのインド国側も軍事力を用いてゴアを独立させる余力もなかったため、ゴアのポルトガル支配は続いた。

インド人の中では、ゴアに関してはガンジー精神で取り戻すしかないとして、“サチャグラハ（非暴力・不服従）運動”がゴアでも始まった。1949年インド政府は、リスボンに公使館を開設し返還交渉の申し入れを行なった。しかしポルトガル政府はゴア返還の交渉を拒絶し、1953年6月に公使館を強制的に閉鎖させた。それに対して1954年7月、ゴアのナショナリスト代表7名がインド領内在住のゴア人による声明書をインド政府に手渡した。その内容は、ゴアは「地理的、経済的財政的見地から言ってもポルトガルとほとんど密接な関係を持っていない。我々の進むべき道はポルトガルとではなく、インドと共に進むこと」⁴という彼らの強い決断を示すものであった。7月21日ゴア統一戦線派の義勇隊の一団が民衆の支持を得てポルトガル人警官の武装を解除し、ダマンのダトラとナガル・ハヴェリの行政機構を接収してしまった。しかし1955年には、ゴアへ入ろうとしたインド人のサチャグラハの行進がポルトガルの警察に発砲され、死者20人以上、負傷者500人近くを出す惨事が起きた。この武力行為は、ゴア人のポルトガル統治に対する反感を一層高めた。その後もサチャグラハ運動では毎年のように流血の事件が繰り返され、「非暴力」のインド人に対して暴力を振るうポルトガルに、インド政府の怒りが爆発した。

1961年12月18日、『勝利の作戦』の名の下にインド軍はポルトガル領に侵攻して、一挙にポルトガルからのゴア解放を行った。インド軍がやってきた時、ゴアの人々は息を潜めていたという。建物や橋にポルトガル軍がダイナマイトをしかけたという噂があり、家を出る事ができなかったのだ。しかし実際は爆破も戦闘もなく、ほとんど無血のうちにゴアの政権はポルトガルからインドへと渡され、451年に及ぶポルトガル支配は幕を閉じた。

ゴアに固執する理由

³ 中村二郎「インドのゴア問題」『東邦経済』（25巻 1955年）、P17。

⁴ 松谷賢次郎「ゴア問題」『東京外語大学論集』（6 1957年）、P65。

このようにして 451 年という長期にわたる占領はついに終わりを迎えたわけだが、今日のゴアのあり方を考えると、疑問点を 2 つ考える事ができる。まず、ポルトガルがこれほどまでにゴアを始めとするポルトガル領の返還に応じない理由は何であったのかということだ。ゴアがポルトガルにとって、経済的にも政治的にもあまり意味をなさないことは前述の通りである。にもかかわらず、なぜポルトガルはゴアに固執したのだろうか。

ポルトガル政府によると、インド政府が主張している地理、歴史、人種、言語、文化などに基づいての国分けは無意味であり、「国境を定め、権利を確立し、行政権を与えるものは地理的要因ではなく、歴史的要因である」⁵ とした。ポルトガル政府にしてみると、ゴアとは次のようなものであった。「本国財政の大きな債務者であり、そこには経済的或は政治的植民地主義或は帝国主義の如何なる跡も見出すことはできない。さらにゴア人は 1761 年本国国民と平等の権利を持つと定められており、彼らはポルトガル市民である」⁶。つまりポルトガル人にとって、ゴアとは多くの努力をはらってポルトガルのものとした領土で、しかも 16 世紀以降ずっとポルトガルの統治下に置いてきた土地であるので、今さらゴアをインドに返還する理由は無いということだ。しかもそれ以上にポルトガルにとってゴアとは「植民地というよりも、特別な型の国」⁷ となっていた。しかも占領期間が 450 年という長きにわたっていたので、ポルトガル人はゴアを「ポルトガルの聖なる一部」として扱うまでになってしまったのだ。そのためポルトガル人はゴア人の民族感情をかえりみず、返還問題がこじれたのであった。

確かに、ゴアがポルトガルの本国から遠く離れている事をもって ゴアはポルトガルの一部でないというならば、ハワイがアメリカ合衆国の一部である事を受け入れるのは難しい。しかし、1510 年にアルブケルケが侵攻して以来、それまでにあった伝統的ゴア文化を壊して、ポルトガルの領土にしてしまったこの地を、はたして「植民地ではない“特別な型の国”」などと言えるのだろうか。また「ポルトガルの聖なる一部」を武力をもって鎮圧させる、という行為に 国際社会は矛盾を感じなかったのであろうか。ゴアにおいてはカソリック教の宣教活動も長く行なわれていたため、ポルトガルのサラ

⁵ 松谷賢次郎 「ゴア問題」 『東京外語大学論集』(6、1957年)、P66-67。

⁶ 同上、P67

⁷ 同上、P68

ザール首相はローマ法王が自国の言い分を支持することを期待した。しかし皮肉な事に、ローマ法王ですら こうしたポルトガルの主張を後押しすることは無かった。

ここに、さらにもう1つの疑問点が浮かぶ。インドの人びとは、ポルトガルによるゴアの支配を歓迎するどころか嫌った。そしてポルトガル人にゴアから出て行って欲しいと望み、最後は暴力を行使して問題を解決するに至った。にもかかわらず、ゴアの人びとは、ポルトガル統治時代の文化的遺産をその地に残すことにした。これはなぜなのだろうか。

現在のゴア

ポルトガルの支配から解放されたゴアは、インド軍による占領後、ダマンやディウとともに5ヶ月間の軍政を経て連邦直轄地域になり、1987年からはパナジ（Panjim）を首府とした“ゴア州”としてひとつの州となった。その際、となりのマハラシュトラ州（インド経済と芸能の中心地ムンバイを都とする州）に統合されるべきか、それともひとつの州として独立するのかが議論が分かれた。インドは多言語国家のため、主に話されている言葉ごとに州を分けることがしばしばあり、ゴアで話されているコンカニ語は、言語なのか方言なのかという論争が起こった。ポルトガルの占領中、旧ヒンドゥー教の上層部はポルトガル語を身につけたのだが、母語はコンカニ語であった。しかしコンカニ語は“話される言語”であり、“書かれる言語”ではなかったため、コンカニ語が言語であるという認識も弱かった。しかし言語から離れて、宗教を見てみると、マハラシュトラ州は1.09%であるのに対して、ゴアのキリスト教徒は人口の26.68%で、ゴアにはキリスト教徒が圧倒的に多い。（下図参照）

宗教人口比(2001年) (数字は %)

宗教	ヒンドゥー教	イスラム教	キリスト教	シク教	仏教	その他
ゴア	65.78	6.84	26.68	0.07	0.05	0.57
マハラシュトラ	80.37	10.60	1.09	0.22	6.03	1.69
全インド	80.46	13.43	2.34	1.87	0.77	1.13

このような宗教的特長にからめて言語的特殊性も認められたのか、ゴアは1つの州として独立する事となった。ちなみに現在州内では、コンカニ語やインド全般で話されている英語の他に、ポルトガル語を話す住民も30,000から50,000人程度存在する。つまりゴアの人々は、ポルトガルの支配が終わった今でも、ポルトガル文化色の濃い生活をしているのだ。例えば今日でも、街のいたるところにカトリックの教会を見ることが出来るし、毎週日曜日には教会で礼拝が行われる。街にはポルトガルが残したアズレージョと呼ばれる白と青を中心とするタイルがやたらと目に付く。また、肉食に対してのタブー感が強いインド社会と対照的に、ゴアは肉食に対して全くの抵抗のない社会である。ポルトガルによる支配を、ゴアの人びとは歓迎しなかった。しかし、450年にわたるポルトガルの支配のために、ポルトガルの文化要素は、すっかりゴアの「伝統的な一部」となってしまう、ゴアの人びとはそれらを消し去りようがなかったのだ。

インドの一部となったゴアは、鉄鉱石採掘と観光産業に力を入れる事で発展した。ゴアでは豊富な鉄鉱石が発見され、すでに1951年から日本企業との合弁で採掘が始まっていた。かつての“黄金のゴア”において潤ったのはポルトガル人だけだったが、独立後のゴアは鉄鉱で潤った。50年代末のゴアの人口は60万人だったが、労働者が足りずに近隣のマハラシュトラ州やカルナタカ州からインドの他地域より高い賃金で労働移民を受け入れていった。こうして2001年までに州の人口は135万人まで達した。

独立後のゴアの発展に関して何よりも注目に値するのは、観光産業の発展である。自由貿易港ではなくなったものの、特別措置で関税が安く、ショッピング目当てのインド人観光客を数多く誘引するようになった点が、観光産業としての成功の秘訣だ。さらに大切なのが、ゴアの西側に広がる美しいビーチを、リゾート地として売り出したことだ。これは成功して、アンジュナ・ビーチは60年代から70年代にかけて「ヒッピーの楽園」として有名になった。しかしその一方で、観光客の増大により犯罪が増加し麻薬汚染も広がる、という問題が生じた。(写真4)

それより一層重大なことは「ポルトガルの遺産である教会や修道院を売りにした西洋的ゴア・イメージの構築」⁸が戦略としてとられたことである。ゴアが州として成立する1年前の1986年には、聖フランシスコ・ザビエルの墓を収容するボム・ジェズ・

⁸ 松川恭子 「映画における場所イメージの構築と観光戦略—インド・ゴア州の場合」『奈良大学紀要』(34巻2006年)、P149。

バシリカや聖フランシス修道院などポルトガル時代のキリスト教建築が「ゴアの聖堂と修道院」として世界遺産に登録され注目を集めた。

こうしてアラビア海沿いに連なる美しい浜辺、荘厳なキリスト教会、それと共に残るインド独自のヒンドゥー文化と、東洋と西洋が混ざり合った場所としてのゴアが誕生する。インドの他の地域では不可能な“(ヨーロッパ風の)贅沢への逃避”を味わう場所として、国外からの観光客と共にインドの他地域からの観光客も増加していった。ゴアは「インドでありながらも、インドでない土地」⁹として観光地化され、ゴア経済の重大な役割を担うようになっていったのだ。

2章 世界遺産としてのオールドゴア

冒頭でも触れたが、ポルトガル領ゴアの中心地であるオールド・ゴアは「ゴアの教会と修道院」として世界遺産に登録されている。これは前章で考察した、インドと、ゴアと、ポルトガルの関係からいって非常に興味深いことである。この章では、世界遺産とは何かを明らかにし、ゴアにおける「歴史遺産」としての「ポルトガル文化」の価値について考える。

世界遺産

世界遺産とは ユネスコのパンフレットによれば「地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から引き継がれた貴重なたからもの」¹⁰である。その“たからもの”を守るために、世界遺産条約という条約に基づいて世界遺産リストに登録する。このリストに登録された“たからもの”(=遺跡や景観そして自然など人類が共有すべき「顕著な普遍的価値」を持つもの)が世界遺産なのだ。

⁹ 松川恭子 「映画における場所イメージの構築と観光戦略—インド・ゴア州の場合」『奈良大学紀要』(34 巻 2006 年)、P152。

¹⁰ (社)日本ユネスコ協会連盟 パンフレット。

世界遺産に関することが述べられた「世界遺産条約」は、正式名を「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」と言い、1972年11月16日にユネスコ総会で採択された。2007年10月現在、世界遺産条約の締約国数は185カ国にのぼった。

そもそも、様々な国の記念建造物や遺跡、景観を守るために国際的運動を起こそうとする考えは第一次世界大戦後からあった。しかしこの頃にはまだ、各国に強制力を持つ規定を国際機関が発すること、各国は抵抗を感じていた。第二次世界大戦後、1960年代にエジプトのナイル川流域にアスワン・ハイ・ダムを建設することが決まった際に、そうした感覚は転機を迎える。このダムが建設される事により、古代エジプト文明の宝であるアブ・シンベル宮殿の谷が水没してしまうかもしれないという事態に面して、遺産保護に対する国際意識が高まり、エジプトとスーダン両国からの要請を受けて、ユネスコが水没遺跡救済キャンペーンを開始した。これにより世界60ヶ国の援助を得て、技術支援、考古学調査支援などが行われ、ヌビア遺跡内のアブ・シンベル神殿の移築を行うことに成功した。これがきっかけとなり、開発から歴史的価値のある遺跡、建築物、自然等を国際的な組織運営で守ろうとする機関が生まれたのである。そして前述の通り、1972年11月16日、ユネスコ・パリ本部で開催された第17回ユネスコ総会で、世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約（世界遺産条約）が満場一致で成立し、1973年アメリカ合衆国が第1番目に批准、締結し、20ヶ国が条約締結した1975年に正式に発効した。

この条約の第4条は次のように述べている。「各締約国は、文化遺産および自然遺産を認定し、保護し、価値を与え、未来の世代に継承していくと言う義務を滞りなく行うことが最優先課題であることを認識する。このため各締約国は使用できうる自国の資力の最大値を用いて、ならびに万一の場合は、取得しうる国際的援助及び協力、とくに財政上、芸術上、学術上、及び技術上の援助及び協力を得て最善を尽くす」¹¹ つまりユネスコは人類にとって特別な価値のあるものを保護する必要性を明らかにし、その価値あるものを地球全体で守っていくこと、保護することに「参加することが国際社会全体の任務である」¹² ことを明らかにした。

世界遺産に登録するには何よりもまず、世界遺産条約の締結国になる事が必要である。登録を求める地域の担当政府機関が暫定リストをユネスコ世界遺産センターに提出し、

¹¹ 水嶋英治『世界遺産』（白水社 2005年）、P15。

¹² 水嶋英治『世界遺産』（白水社 2005年）、P17。

暫定リストに記載されたものの中から原則として1年に1物件、ユネスコ世界遺産センターに推薦する。推薦された物件に関して、文化遺産候補は国際記念物遺跡会議

(ICOMOS)、自然遺産候補は国際自然保護連合(IUCN)という専門機関が現地調査する。この調査では当該地の価値や保護・保存状態、今後の保全・保存管理計画について評価がなされる。この評価に基づき、ユネスコ世界遺産センターが登録推薦を判定し、これをもとに世界遺産委員会が最終審議を行なった上で、正式登録される。世界遺産は、顕著な普遍的価値をもつ建築物や遺跡などの“文化遺産”、顕著な普遍的価値をもつ地形や生物、景観などをもつ地域の“自然遺産”、文化と自然の両方について顕著な普遍的価値を兼ね備えるもの“複合遺産”という3種類に分類される。また内容上の分類ではないが、後世に残すことが難しくなっているか、その強い懸念が存在する場合、該当する物件は危機にさらされている世界遺産リスト(危機遺産リスト)に加えられ、別途保存や修復のための配慮がなされる事になっている。

世界遺産に登録されるための前提条件は“顕著な普遍的価値”を持つことで、登録の基準は「世界遺産条約履行のための作業指針」で示されている以下の登録基準に当てはまらなければならない。

- (i) 人類の創造的才能を表す傑作である。
- (ii) ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展における人類の価値の重要な交流を示していること。
- (iii) 現存する、あるいはすでに消滅した文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは稀な証拠を示していること。
- (iv) 人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体または景観に関する優れた見本であること。
- (v) ある文化(または複数の文化)を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地・海洋利用、あるいは人類と環境の相互作用を示す優れた例であること。特に抗しきれない歴史の流れによってその存続が危うくなっている場合。
- (vi) 顕著で普遍的な価値をもつ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または明白な関連があること(ただし、この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい)。
- (vii) 類例を見ない自然美および美的要素をもつ優れた自然現象、あるいは地域を含む

こと。

- (viii) 生命進化の記録、地形形成において進行しつつある重要な地学的過程、あるいは重要な地質学的、自然地理学的特徴を含む、地球の歴史の主要な段階を代表とする顕著な例であること。
- (ix) 陸上、淡水域、沿岸および海洋の生態系、動植物群集の進化や発展において、進行しつつある重要な生態学的・生物学的過程を代表する顕著な例であること。
- (x) 学術上、あるいは保全上の観点から見て、顕著で普遍的な価値を持つ、絶滅のおそれがある種を含む、生物の多様性の野生状態における保全にとって、もっとも重要な自然の生育地を含むこと。」¹³

世界遺産登録には、以上の 10 個の基準の中から少なくとも 1 つに合致するとともに、真実性や完全性の条件を満たし、適切な保護管理体制がとられていることが必要である。

負の世界遺産

世界遺産は「過去から引き継がれた貴重なたからもの」だが、中には“負の遺産”と呼ばれる遺産もある。“負の遺産”とは戦争や人種差別など人類の犯した罪を証明するようなもので、「人類が犯した悲惨な出来事を思い出させ、そうして悲劇が二度と起こることのないよう戒めとするために登録されたもの」¹⁴である。“負の遺産”には明確な定義づけがない。世界遺産条約にも何の記述もない。しかも“負の遺産”には、比較的新しい時代の建造物が多く、その保存に関する価値評価も難しい。一般的に文化財として政府が指定するものは 50 年以上の歴史を持つもの（または第二次世界大戦以前のもの）とされる事が多いので、歴史が浅いものには、文化的でありうるかについて疑問を表明する場合もある。そのため遺産委員会が“負の遺産”を指定するのは例外的な場合に限るという方針を採っている。

負の遺産には下記のもの挙げられる。（カッコ内は国名、登録年、登録基準）

¹³ 社団法人日本ユネスコ協会連盟パンフレットより。

¹⁴ インターネット ウィキペディア “負の遺産” 検索

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%B2%A0%E3%81%AE%E9%81%BA%E7%94%A3>
(2008 年 12 月 23 日閲覧)。

- アウシュヴィッツ-ビルケナウ ナチスドイツ強制絶滅収容所（1940-1945）（ポーランド、1979年、vi）
第二次世界大戦中、ドイツのナチス党がユダヤ人の大量虐殺を行った強制収容所。
- 原爆ドーム（日本、1996年、vi）
第二次世界大戦時に世界で始めて実践使用された原爆の悲惨さを伝える記念碑。
- ゴレ島（セネガル、1978年、vi）
数百万人が北中南米に送られたという奴隷貿易の中継点。
- ロベン島（南アフリカ共和国、1999年、iii, vi）
大航海時代以来、ネルソン・マンデラをはじめ多数の政治犯を収容した監獄の島。

これらの負の遺産は全て上に挙げた登録基準の(vi)を満たしている。奴隷貿易や戦争のつめ跡は「顕著で普遍的な価値を持つ出来事」であるということだ。さらにアウシュヴィッツの強制収容所の登録基準には「人道に反して犯されたもっとも重要な罪を具体的に記録する例」¹⁵と書かれており、この収容所の保持が「世界平和の維持に貢献する」としている。つまり“負の遺産”を世界遺産に登録するのは、過去の過ちを繰り返さないという国際社会の意思表示にしたかったのであろう。

オールド・ゴアの町並み

ポルトガルの植民地支配時の影響が色濃く残る、オールド・ゴアの町並みは“負の遺産”と言えないだろうか。この疑問を考えるためにまず、ポルトガルによるゴアのまちづくりの仕方を見ていこう。

ゴア占領の指揮者であるアフォンソ・デ・アルブケルケは、インド制覇というよりもむしろ、ゴアを新商業都市に仕立てたかった。そのため、15世紀に世界貿易の中心となり当時世界最大級の人口を有した、母国ポルトガルの首都リスボンをモデルにした。ポルトガル軍はそれまでであったゴアの街を焼き尽くし新たな街を作った。港のドックにつながる場所には、広い公共広場が設けられそこを中心に大聖堂や修道院、総督の宮殿など主要な建物が建てられた。街には不規則で曲がりくねった道路が網の目のようにめ

¹⁵ 長谷川大「負の遺産と世界遺産条約の挑戦」2006年9月27日作成
<http://allabout.co.jp/travel/worldheritage/closeup/CU20060927B/>
(2008年12月26日閲覧)

ぐらされ、港には大規模な堤防が設けられた。マンドヴィ側に面したゴアの港は、東アジアを連結するベンガル湾の航路と、東アフリカ沿岸に達するアラビア海の航路との中継地として機能すると共に、インド内陸の市場にも開かれた重要な位置を占めることとなった。

アルブケルケの死後、ポルトガルはゴアにキリスト教を布教させるためのまちづくりを行った。街にはキリスト教の教会が多数作られ、もともとあったヒンドゥー教やイスラム教の文化を壊すことも多々あった。外来文化としてのイスラムと比較すると、キリスト教はあくまでもヨーロッパ風の建築形式をとり、インド古来の建築との融合は求めなかった。16世紀末までに。ゴアの街には60にも及ぶバロック様式の聖堂や壮麗な宮殿が作られた。このほかにもゴアにはポルトガルによって計画的に構成された数々の聖堂や教会が作られた。ゴアの仏教やイスラム教の寺院でさえ、内部はインド古来の装飾が施されているが、外観はバロック、ルネッサンス様式を基調とするようになり、その上にゴシック様式が加味されたりして、この土地独特の建築様式を示すようになった。ただし17世紀オランダがゴアを侵攻した際、ポルトガル人が築いた修道院やその他のキリスト教施設が破壊されたので、今日では現存する文化遺産は少なくなっている。

ここで、ゴアのガイドブックや観光局パンフレットにも載っているポルトガル遺産をいくつか紹介しておこう。

○ ボン・ジェズ教会 (写真5)

日本にもキリスト教の布教に訪れたフランシスコ・ザビエルの遺体が安置されている。付属礼拝堂は大理石に床が敷き詰められ、宝石で飾られている。建物の外観は風化して荒れ果てた印象だが、入り口外壁のアラベスク模様の装飾や教会内のレリーフが往時の華やかさを物語っている。1605年に建造された。

○ 聖フランシスコ教会 (写真6)

オールド・ゴア内で最も荘厳な建物の一つ。この教会には金箔を施した木彫りの装飾や聖フランシスコの生涯を描写する壁画がある。教会には考古学博物館が併設され、教会入り口の隣から入場できる。

○ 大司教座教会

オールド・ゴア最大の教会で1986年に世界遺産に登録された。塔の中には「黄金の鐘」と呼ばれる美しい鐘がある。ゴアを占領したポルトガル総督が聖カタリーナをゴアの守護聖人として定め、聖堂を建てたのが始まりで、その後大司教座教会になった。ポルトガル・ゴシック様式で、外部はトスカーナ風、内部はコリント風である。

○ パナジ教会 (写真7)

ゴアの州都パナジ (Panjim) の中心地に立つ白亜の教会。ポルトガル統治時代に建てられた大きな教会で、礼拝堂には豪華なシャンデリアがいくつも吊り下げられている。現在でも、日曜日には早朝から多くの人々が礼拝に訪れる。

○ シュリー・マンゲーシュ寺院 (写真8)

黄色い壁と屋根・青のラインと、他のヒンドゥー寺院とは異なりポルトガルの影響を受けている。ポルトガル占領時に破壊される事を恐れて街のはずれに移築された。

オールド・ゴアは、「ゴアの教会と修道院」が遺産登録基準の ii, iv, vi に当てはまるとの判定で世界遺産に登録されている。ということは、オールド・ゴアの町並みは、ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、都市計画、景観等の発展における人類の価値の重要な交流を示している(ii)、人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体または景観に関する優れた見本であり(iv)、顕著で普遍的な価値をもつ出来事(vi)であるということになる。

しかし、ここにはヨーロッパ偏重の価値基準、判断が働いていないだろうか。ゴアの町並みは、この地を植民地統治したポルトガルによって、ポルトガル人の都合のいいように作られたものであるということは先に述べたとおりだ。ゴアには「東方のローマ」、「リトル・リスボン」「東方一の貴婦人」など数々の異名がつけられたが、これはゴアにたくさんの教会や修道院が作られたからである。ヒンドゥー寺院が立ち並ぶだけでは、ヨーロッパ人の目からみて「東洋一の貴婦人」にはなれなかったのだ。さらに考えれば、ポルトガル人はゴアに昔からあった建物を焼き払い、そこに新しくポルトガル風の街を作ったわけだから、これは“負の遺産”にあたる“過去の過ち”ではないのであろうか。先住のゴア人の文化遺産を無視して、ポルトガル人がポルトガル風に街を作り、時間が経ち、それが世界遺産に登録された――これではヨーロッパの非ヨーロッパ文明圏に対する文化的影響力をヨーロッパが自画自賛しているにすぎないようにも思える。にもか

かわらず、今日ゴアの政府観光局が出しているガイドブックやパンフレットには、ポルトガルの残した遺産が多数掲載されている。反対に、ゴアに残るヒンドゥー教の寺院やイスラム教のモスクなどの多くは、ガイドブックにはあまり掲載されていない。あるとしても上記のシュリー・マンゲーシュ寺院のような“他とは違う”寺院のみだ。つまり 冷静に客観的に考えれば、”負の遺産 “であるはずの「ポルトガルの遺産である教会や修道院」を「西洋的ゴア」¹⁶ として売り物にしているのが 現在のゴアの公的姿勢といえる。

3章 観光資源としての植民地遺産

前章では、ゴアの“負の遺産”が観光資源となっていった過程を明らかにしたが、この章ではこの点をさらに推し進めて考察する。すなわちゴア以外のポルトガルの植民都市はどうなっているかを、同じくポルトガルの占領下にあったマカオ、マラッカについて検討する。

マカオの場合

マカオは、中国の南東沿岸に位置し、ゴアと同じ頃 1514 年にポルトガル人が来航した。ポルトガルはマカオを拠点に中国、日本とヨーロッパ間の中継貿易によって富を得た。マカオは 16 世紀半ばからポルトガルの植民地となり、ポルトガル風の町並みが作られ繁栄した。アヘン戦争（1840－42 年）で対岸の香港島がイギリスの植民地となると、ポルトガルも 1845 年マカオの“自由港”成立を宣言し、1887 年にはポルトガルが統治権を得て植民地化した。しかし当時ポルトガルの国力自体がすでに衰えていた事と、イギリスの植民地となった香港が繁栄し始めていたことにより、マカオは衰退していく。1949 年中華人民共和国が成立しても、ポルトガルはマカオを植民地として保持し続けた。しかし 1966 年に中国系住民による反ポルトガル闘争（マカオ暴動）が起こると、中国

¹⁶ 松川恭子 「映画における場所イメージの構築と観光戦略—インド・ゴア州の場合」『奈良大学紀要』（34 号 2006 年）、P151。

側の影響力が増した。マカオ暴動以降、中国側からの影響と返還の圧力が高まる中、1974年ポルトガル本国では“カーネーション革命”が起こり、無血軍事クーデターが独裁体制を終わらせ、代わって誕生した左派系の新政権は海外植民地の放棄を宣言した。ここに1987年マカオ返還共同声明が調印され、1999年12月20日ついにマカオはポルトガルから中華人民共和国に返還され、同国の特別行政区となった。

マカオは、ゴアと同じくポルトガルによって作られた町並みを持ち、今でも教会やポルトガル風の家や通りが残っている。そうした22の歴史的建築物と8ヶ所の広場を含む日常生活地域が2005年7月“マカオの市街地区”として世界遺産に登録されている。主な見所は、中国で初めて建てられた大学とイエズス会の教会の跡である「聖ポール天主堂跡と天主教芸術博物館」¹⁷ や、ポルトガルの熟練工により波形模様の石モザイクが敷き詰められた街の中心地「セナド広場」 や、数々の教会や寺院である。ちなみに1847年ポルトガルによって合法化され、広州で貿易に携わる欧米人が楽しんだ「ギャンブル」が今でもマカオの観光の目玉商品でもある。

マカオ観光局のパンフレットによると、マカオの最大の魅力は次のようなものだ。

「石だたみの坂道があり、洒落たお店が軒先を分け合っている。味を競うレストランがあり、活気に満ちた暮らしがある。中世の風が吹いて、南欧の香りも漂う。旅行者は知らず知らずのうちに世界遺産の時空に溶け込んでしまう」¹⁸。またマカオ観光情報局のホームページによると「もともとポルトガル領だったので（ポルトガルの海外県）、ところどころにヨーロッパ風の雰囲気に残る素敵な町です」¹⁹と書かれている。マカオもゴアと同様、ヨーロッパ風の雰囲気を“素敵”と好意的に表現し、ポルトガルが残した街並み自体を世界遺産に登録して、観光の目玉商品にしている。

マラッカの場合

¹⁷ インターネット「マカオ観光局公式サイトスポット紹介」
中華人民共和国マカオ特別行政区観光局日本地区マーケティングリプレゼンタティブ(制作年不明)

<http://www.macautourism.jp/spot/leaf.php?c1=4&c2=5> (2009年1月9日閲覧)。

¹⁸ マカオ観光局「マカオ・トラベルエージェント・マニュアル」マカオ観光局日本地区マーケティングリプレゼンタティブ、2008年、P30。

¹⁹ インターネット「澳門観光指南」マカオ観光情報局 2007年作成
<http://www.macauguide.jp/whatis.php> (2009年1月9日閲覧)。

マラッカはマレー半島西海岸南部に位置し、東西交通の要衝マラッカ海峡に面する港市である。1400年にマラッカ王国が誕生し繁栄したあと、1511年からポルトガルが130年間領有した。その後、1641年にはオランダが奪取し、1795年からはイギリスの拠点となり、1824年からはイギリスの海峡植民地の一部となった。第2次世界大戦を経て起こったナショナリズムにより、マラッカだけではなくマレー半島全土で独立運動が盛んになり、1947年ついにマレーシアはマレー連邦として独立を果たした。

マラッカの街も、長く支配されたポルトガル・オランダ・イギリスの諸文化の影響を強く受けており、同時にマラッカ王国時代のイスラム文化などマレーシア独自の文化との融合で出来上がった特有の雰囲気を見ることが出来る。この街も「東アジア、東南アジアにおいて類をみないユニークな建築様式、そして文化的な町並みを構成していること」²⁰ が高く評価され、2008年7月にイギリスの植民地であったペナン島・ジョージタウンと共に「マラッカ海峡の歴史的都市群：マラッカとジョージタウン」としてユネスコ世界文化遺産に登録された。

マラッカの世界遺産区域内の主な観光名所を紹介する。マラッカ王国時代の名所はスルタンの王宮を再現したマラッカ・スルタン・パレスで、現在は文化博物館となっている。ちなみにマラッカ王国はイスラム教を積極的に受け入れるほか、インド、中国やアラブ諸国との貿易の中継点として繁栄した。ヨーロッパ統治時代にはマラッカにもキリスト教を主体とした街づくりが進められていた。ポルトガル統治時代には、1521年ポルトガル軍によってセントポール教会跡に建てられたし、オランダ統治時代はスタダイス(議事堂・市役所)が建てられ、オランダが行政を指揮する役所として使われていた。現在はマレーシアの歴史を豊富な展示物で埋め尽くした博物館として一般に公開されている。また、マラッカ川を挟んで西側にはチャイナ・タウンのエリアがある。このエリアは大陸からやってきた中国人と地元マレーの女性が結婚して生まれた混血児の子孫が形成した文化が多く残っている。この地域には中国人をはじめ、イスラムモスクやヒンドゥー寺院もある。マラッカの歴史的都市群は、2008年7月とごく最近 世界遺産に登録された。

²⁰ インターネット「マレーシア政府観光局公式サイト」マレーシア政府観光局 2009年作成 <http://www.tourismmalaysia.or.jp/region/malacca/heritage.html> (2009年1月9日閲覧)。

ポルトガルがアジアで直轄統治していたゴア、マカオ、マラッカに共通することを見ても、ポルトガルの残した街並みをユネスコの世界遺産に登録し、積極的に保護していること、そしてその世界遺産を観光の目玉商品として扱っていることだ。各地域の政府観光局のホームページやガイドブックにはそうした世界遺産を“東西の融合”として売り出している。

これはポルトガルの旧植民地が、短所はあったにしても「東西文化の融合」に比較的成功したという事なのであろうか。それとも他にも かつて植民地であったところが現在「東西の融合」として世界遺産に登録されて観光地になっているところはあるのだろうか。これを知るために、旧植民地のなかで、世界遺産に登録されて観光地化している場所があるかどうか考察してみる。

ポルトガル支配以外の植民地遺産

まずポルトガル以外のヨーロッパ諸国に支配された植民地について考察する。

スリランカにある「ゴール旧市街とその要塞群」。ここは 1988 年に世界遺産に登録された。ゴール旧市街は、16 世紀から 20 世紀半ばまで、ポルトガル、オランダ、イギリスをはじめとしたヨーロッパ諸国の植民地支配の拠点がおかれていた。西洋風の建物が並び、アジアにおける植民都市の面影を色濃く残す街だ。この地方の人々は、長く西欧文化を取り入れながらも、古来の土着文化をそのままに残し、今も特異な文化と生活を保っている。

一方フィリピンは 300 年間に渡りスペインの支配化にあった。スペイン人宣教師達は、各地に石造りの教会を作り、今でもこの地にはスペイン様式の教会が数多く残る。これが「フィリピンのバロック様式教会群」として 1993 年に世界遺産に登録された。教会の壁面には、熱帯植物のレリーフや東洋的な装飾が数多くあしらわれている。これはスペイン人の宣教師達が土着の信仰を容認し、カトリックと融合させていくことによって布教の浸透をはかったからだ。そのかいあってかフィリピンは今でもアジアで唯一のカトリックの国で、人口の 85%がその信者といわれている。日曜日になると子どもや若者もミサに訪れ、教会は満員になる。

フィリピン政府観光省では、「プレミアム・リゾート・アイランド フィリピン」としてリゾート地としてのフィリピンを売り出している。観光局のホームページには美

しい海や豊かな自然の写真と共に、数々の教会の写真が載せられている。フィリピンの基本情報の欄には「ヨーロッパ・アメリカ・アジアの生活様式と文化が一堂に会して」²¹ という記述もある。ここでも「東西融合」が観光のテーマになっているようだ。

アジア以外でも、パナマ共和国の「植民地時代のパナマ・ビエホの歴史的遺産とパナマ旧市街」（旧スペイン領）、メキシコの「歴史的要塞都市カンペチェ」（旧スペイン領）、「アルジェのカスバ」（旧フランス領）、セネガルの「ゴレ島」（旧フランス領）などが、世界遺産に登録されている植民地遺産の例だ。ヨーロッパの旧植民地統治が造ったものが世界遺産になっている例はかなり多い。

ここで、一つの共通点に気付く。植民地化していた国を見ると、ポルトガル、スペイン、フランスと、カトリック教国が多い。植民地の多さだけで考えたら、19世紀末に、各大陸に広大な植民地を領有し、世界の地上面積の約40%、約5億人を統合し、“日の沈まぬ国”とまで称えられた大英帝国の植民地遺産が一番多いはずである。にもかかわらず、旧イギリス植民地であった地域の世界遺産登録は数少ない。

これは、世界遺産の選定をするユネスコにおいて、フランスの発言権が非常に大きいということも一因であろう。世界遺産選定委員会は1977年から2008年7月までに32回開催されているのだが、その中でフランスでの開催は8回と他国よりも群を抜いて多い。さらに文化遺産の指定が、フランスの主な宗教であるカトリックの教会建築や、石造りの巨大モニュメントに偏している傾向もある、という。それでカトリック文化伝播の役割を果たしたスペインやポルトガルの海外植民地におけるコロニアル都市や歴史地区の多くも指定をうけているのだ、という指摘もされている。²² もし、これが正しければ、フランスが好意的であるような植民地遺産が、優先的に世界遺産登録されている傾向があるかもしれない。

日本の統治下にあった地域の場合

²¹ インターネット「プレミアムリゾートアイランド フィリピン」フィリピン政府観光省 2008年作成

<http://www.premium-philippines.com/info/index.html>（2009年1月11日閲覧）。

²² 野間晴雄「ゴア,マラッカ,マカオのトポス--アジアにおけるポルトガル文化遺産」『関西大学文学論集』(57巻、2号 2007年)、P127。

次に日本統治下にあった植民地遺産を見てみよう。ポルトガルのゴア支配は451年、マカオ支配は485年と相当長く続いたが、日本の植民地統治期間は、一番長い台湾で約50年、朝鮮で35年、一番短い中国東北部（旧満州）でわずか12年ほどである。日本統治時代の遺産はどのような運命をたどっているか概観する。

日本は、明治半ばから1945年の終戦前後までの時代、台湾、サハリンの南半分（樺太）、朝鮮半島、ミクロネシア、中国東北部（旧満州）に日本の植民地統治を拓けていった。日本統治時代には、ヨーロッパ諸国の所有する植民地と同様に、日本本土から多くの日本人が移り住み、住宅、官公庁庁舎、学校、駅舎、病院、放送局、工場、軍事施設、そして神社など、あらゆるものを建てた。それらの建築様式は、あるものは日本的であり、あるものはヨーロッパ的という特異な特長がある。純粹に日本的なものとして存在した神社は、移住してきた日本人の心の拠り所として存在する一方で、国が作り管理するものもあり、参拝が強要された。これはヨーロッパ諸国が統治下に置いた地域に教会を建てたのと同じような事であろう。日本が旧植民地に建てた海外神社は、終戦の時期には分かっているもので666社にまで増えて、その内訳は満州の302（関東州は12）を筆頭に、樺太が127、朝鮮が80、台湾は66、中国50、南洋が27等であった。²³

これら海外神社は日本の敗戦が決まると地域ごとに少し異なった終焉を迎えた。大日本帝国最北端の地・樺太では、住民の多くが日本から渡って来た人たちであったため、神社が支配のシンボルとして狙い打ちにされたという事例はほとんどなかった。しかし終戦直前、ソ連軍の侵攻によって戦渦に巻き込まれたりして、多くが消滅した。終戦後、日本に変わって樺太を統治したロシアは、残った神社について寛容で、しばらく神社活動は維持された。しかし1960年代に日本人引き揚げが完了すると「島の複雑な過去や、わずか40キロメートル向こうに別世界（日本）があることを島の人々に思い起こさせない目的」²⁴で、日本の遺産は破壊されるようになった。今日では、海辺の荒涼とした丘に鳥居のみが取り残されていたり、灯籠や水盤のみが野原の真ん中に残されていたり、かつての樺太庁博物館がサハリン州郷土博物館として利用されていたりしている程度である。

台湾の場合、神社は日本人が引き揚げたから存在価値を失い、荒れ果てる一方であった。新たな支配者となった国民党は日本的な雰囲気を取り去りたく、神社を破壊し別の

²³ 西牟田靖『写真で読む 僕の見た大日本帝国』（情報センター出版局、2006年）、P21。

²⁴ 西牟田靖『写真で読む 僕の見た大日本帝国』、P25。

建物を建てたり、忠烈祠（民族の英雄や日本に対して戦った大陸の抗日戦士を祀ったところ）に改造したりした。あるいは神社跡は、大陸から入植してきた人々のバラックに埋もれたりしていった。さらに国民党は、彼らが日本にかわり台湾を統治することを台湾人に知らしめるために「日本人の手によって設けられた構造物を敢えて完全には撤去せず中国風に改造」²⁵した場合もあった。こうした中で、1990年代以降、台湾に残る日本統治時代の建造物は台湾の歴史を見ていく中で無視できない文化財として保存していくべきだ、という考え方が広まり、2000年代になると本格的な復元作業が始まる。

韓国の場合、日本統治時代に造られた神社は、日本の敗戦が決まると朝鮮人によって破壊され燃やされた。日本時代には「朝鮮の人も納得ずくで参拝しているように見えたが、実際には信じるふりをしていただけ」²⁶であったため、反感が強かったのだ。そのため韓国には現在ほとんど神社は残っていない。

中国東北部（旧満州）の神社も終戦後破壊・放火された。満州では神官がソ連軍人に殺されたり、米軍機で破壊されたり、暴民によって破壊されたりと、かなりの混乱を見せている。ただし、大連にて1934年に竣工した東本願寺は現在も劇場として使用されており、その旧満州中央銀行、関東軍司令部、満州国軍事部などの建物も政府・教育施設として使用されている。

日本の統治下にあった地域に残る日本時代の建造物は、ゴアやマカオ、マラッカの例と異なり、世界遺産に登録されるような扱いは受けていない。また「日本とその地域の融合」をうたって観光の売り物になっているようでもない。ところが最近韓国で、かつての日本家屋が、その構造を活かして洒落たカフェなどに改造され若者の人気を集めるようになっているという。台湾でも、かつての台湾総督官邸（現在台北賓館）－バロック風の壮大な建築で台湾随一と言われる日本庭園をもつ－が2006年リニューアルされ、市民への公開も始まっている。²⁷ さらに集落ごと日本家屋が残る萬英（旧名森坂）という台湾の村は今後観光地としての開発が進む可能性もあるかもしれないという。²⁸ 日本統治時代、樺太の花形産業であったホルムスキの旧王子製紙真岡工

²⁵ 同上、P92。

²⁶ 同上、P119。

²⁷ 「支配の名残に揺れる日本統治の遺構－開発と保存（6）」『朝日新聞』（2008年1月8日）；「カフェになった日本家屋－木浦」『朝日新聞』（2008年1月12日）参照。

²⁸ 『写真で読む 僕の見た大日本帝国』P76。

場は、老朽化が激しくみすぼらしい外見としかいえないが、皮肉にも、かつて樺太に暮らした日本人が郷愁に駆られて観光旅行にやってくる際の人気訪問先である。

日本支配の象徴ともなった旧植民地の建造物も、いつか観光資源となる可能性はあるのだろうか。

第4章 まとめ

観光と植民地遺産

世界各地に残る植民地遺産を見ると、ゴアが特殊なケースではないことがわかった。

“負の遺産”とは第3章でも述べたとおり「平和維持」が目的であり、戦争や奴隷貿易といった過去の過ちを繰り返さないために登録されたものだ。しかし、ゴアに残る聖堂と修道院を世界遺産にすることは「平和維持」が目的とは思えないし、「植民地支配の過ちを後生に伝える」のが真意とも思えない。しかしゴアの人たちは、ヨーロッパの残した雰囲気や「東西の融合」として観光の売り物にした。

これは1961年にゴアがポルトガルから独立して自分自身の力で自立しなければならぬ時に「観光産業」に目をつけ、際立ったな特長を国際社会にアピールしようとしたからではなかろうか。ゴアには確かに、かねてから鉄鉱石採掘という産業があった。しかし鉄鉱石算出と輸出による経済成長には限界がある。しかもゴアが独立した1961年当時、インド本国はまだまだ発展途上であった。そのため将来性のある産業が欲しかったのであろう。

「観光においてホストはゲストの期待に応える過程で自身のアイデンティティを再確認する機会を与えられる」²⁹ という。ゴアの人々がポルトガルの植民地遺産を観光の売り物にした理由は、ここに求められるのでないだろうか。ゴアが「観光」産業に目をつけたときに、ゲストの目線で「ゴア」という商品を見てみると、ポルトガルの残したヨーロッパ風のという街並みという「珍しいもの」があった。この珍しい雰囲気は

²⁹ 松川恭子 「映画における場所イメージの構築と観光戦略—インド・ゴア州の場合」『奈良大学紀要』(34号 2006年)、P150。

ゲストには魅力的かもしれない。そこで「東西の融合」というキャッチフレーズを生み出し自国の成長のために利用しようと考えたのではないか。植民地時代の遺産を利用するも、しないも、全ては自国の経済的成長のためである。支配者に押し付けられた価値でもなく、全ては自分たちのための自発的・自主的発想である。こう考えると、他の植民地遺産を売り物にしている観光地の思惑も理解できる。

世界遺産選定には 確かにフランスを始めとするヨーロッパ諸国の思惑が大きく影響しているかもしれない。そのために登録されている植民地遺産はヨーロッパ文明（特にカソリック文化）の息がかかっているものが多いことは否定できない。しかし同時に、かつて植民地にされていた被支配者の思惑もそこに存在するのも確かだ。なぜなら、ある遺産が世界遺産になるためには、登録を求める地域の担当政府機関が暫定リストをユネスコ世界遺産センターに提出しなければならないからだ。つまり暫定リストを提出するまでは、登録を求める地域・国家自らが動かなければならない。逆に言えば、かつて植民地だった地域が世界遺産登録を望まなければ、世界遺産に登録は出来ないということだ。

世界遺産に登録されれば、より多くの観光客を呼び込むことが出来、プラスの経済効果を期待できる。植民地遺産を世界遺産に登録している例は、当然アジア、アフリカなどのいわゆる第3世界に多い。経済発展のために植民地遺産を世界遺産に登録する経済的必然性があるのだ。

確かに植民地という過去は、被支配者にしてみれば忘れがたい“負の事実”である。しかしそのことに固執しては前に進めない。歴史をさらにさかのぼれば、他民族の侵入・征服を記す遺跡、古代の戦争、十字軍に関連した遺跡などの「観光目玉」は世界的に存在する。そしてこれらは“負の遺産”ではなくて、「顕著で普遍的な価値を持つ出来事」（世界遺産登録基準viより）に変化していったのである。要は、当事国の国民が歴史をどのように解釈し、自分たちの未来のためにどう使うか、人類がそれをどう受け入れるかにかかっている、ということだ。

これからの観光地としての植民地遺産

第二次世界大戦後間もない頃は、植民地遺産を世界人類共通の遺産として国際機関が承認登録し、観光の目玉にするという発想は珍しかった。しかし今日、世界遺産に登録

されている植民地遺産がどんどん増えている。そのため世界各地の植民地遺産を「東西の融合」といふ宣伝文句だけで売り込むだけでは、観光客誘致を増やすのは難しいのではないだろうか。そこでゴアのビーチ、マカオのカジノに代表されるような、植民地遺産に、プラス・アルファの価値必要となってくる。

しかし、むやみにこうしたプラス・アルファの価値を付け足すことには注意が必要だ。ゴアのビーチが1960年代から70年代にかけて麻薬や犯罪で汚染された例に見られるように、一般的に観光客が増えると治安が悪くなる傾向がある。治安が悪くなってしまうのは現地の人の生活にも不都合だし、第一、世界遺産に登録されている貴重な遺産の保存・維持にも害が及ぶ危険がある。植民地遺産は、あくまで人類の歴史遺産として大切に保存されなければならない。だから、観光客誘致のためのツールとしてのみ植民地遺産を使うことは控えなければならない。「植民地」という人類史に起こった出来事を観光客に伝えられるような教育的使命を、観光産業の中で果たしていくべきではないだろうか。例えば植民地遺産が残した「東西の融合」の雰囲気や、ただ単純な娯楽の対象にしてはならない。そうした「文化融合」の光と影の両方を、観光の中で国際社会に訴えることができ初めて、世界遺産としての価値をもった土地になると思う。

ゴアをはじめとした世界各地の植民地遺産が、観光客の間に世界の平和共存の意識を高めていくような観光地になっていくことが何よりも望まれる。

— 完 —

使用文献 一覧表

書物

上野光一『インド ワールドガイドアジア (12)』JTBパブリッシング、2006年。

鈴木義里『もうひとつのインド、ゴアからのながめ』三元社、2006年。

西牟田靖『写真で読む 僕が見た大日本帝国』情報センター出版局、2006年。

野間佐和子『ユネスコ世界遺産 (5) インド亜大陸』講談社、1997年。

水嶋英治『世界遺産』白水社 2005年。

雑誌、論文

伊藤努「残る 植民地支配の負の遺産」『世界週報』時事通信社 81号 2000年。

インド政府観光局『ゴアへ行こう～ビーチ・パラダイス』インド政府観光局 2007年。

社会法人日本ユネスコ協会連盟 パンフレット (出版年不明)。

中村二郎「インドのゴア問題」『東邦経済』東邦経済社 25巻 1955年。

マカオ観光局『マカオ・トラベルエージェント・マニュアル』マカオ観光局日本地区マーケティングリプレゼンタティブ、2008年

松川恭子 「映画における場所イメージの構築と観光戦略—インド・ゴア州の場合」、
『奈良大学紀要』34巻 2006年。

松谷賢次郎「ゴア問題」『東京外語大学論集』6 1957年。

野間晴雄「ゴア, マラッカ, マカオのトポス—アジアにおけるポルトガル文化遺産」『関西大学文学論集』57巻 2号 2007年。

インターネット・サイト

NHK 「NHK 世界遺産の旅ーゴール旧市街地」 (制作年不明)

<http://www.nhk.or.jp/sekaiisan/card/cardr037.html>

神谷武夫 「ゴアの聖堂と修道院」 (制作年不明)

http://www.ne.jp/asahi/arc/ind/unesco/16_goa/goa.htm

社団法人日本ユネスコ協会連盟 「世界遺産活動」 (制作年不明)

<https://www.unesco.jp/contents/about/index.html>

中華人民共和国マカオ特別行政区観光局日本地区マーケティングリプレゼンゼタティブ
「マカオ観光局公式サイトスポット紹介」 (制作年不明)

<http://www.macautourism.jp/spot/leaf.php?c1=4&c2=5>

長谷川大 「負の遺産と世界遺産条約の挑戦」 2006年9月27日作成

<http://allabout.co.jp/travel/worldheritage/closeup/CU20060927B/>

フィリピン政府観光省 「プレミアムリゾートアイランド フィリピン」 2008年作成

<http://www.premium-philippines.com/info/index.html>

マカオ観光情報局 「澳門観光指南」 2007年作成

<http://www.macauguide.jp/whatis.php>

マレーシア政府観光局 「マレーシア政府観光局公式サイト」 2009年作成

<http://www.tourismmalaysia.or.jp/region/malacca/heritage.html>

参考資料

- ① ポルトガル風の街並み
- ③ 上部が破壊されたヒンドゥー寺院
- ⑤ ボン・ジェズ教会
- ⑦ パナジ教会

- ② ポルトガル風の街並み
- ④ ゴアの美しいビーチ
- ⑥ 聖フランシス教会
- ⑧ シュリー・マンゲーシュ寺院

